

## 仏の銀蔵

昔々の話です。銀蔵という高利貸しがいました。銀蔵は、生活に苦しむ農民や職人たちに金を貸しては高い利子をつけてもうけていました。

毎日、銀蔵は借金をした人の家を回っては、貸した金を取り立てていました。その取り立ては厳しく、借金しょうぎの証文しょうぶん綴りを前にして、

「さあ、払え。今すぐ払え。」と、小太りの体をゆすって大きな声を出すのです。そんな銀蔵を人々は恐れ、「鬼の銀蔵」と呼んでいました。

ある日のこと、銀蔵は、取り立ての途中、茶屋ちやに寄り、店先の床几しょうぎに腰を下ろし、洪茶をすすりながら好物の団子を食べていました。銀蔵は、時々懐ふとろに手を入れては取り立てた金の重みを確認して、ニタニタとしていました。その時、突然、一羽のカラスが、バタバタと舞い降りてきて銀蔵の団子の一つをひょいといばみ、さーっと飛び去っていきました。



「あつ。」

銀蔵は慌てて手を伸ばしました。なんと、団子の皿の横に置いてあつた証文の綴りがカラスの足に絡まり、あつという間にカラスと一緒に空に消えてしまったのです。

「あれがなくては、取り立てができない。」

銀蔵は、すぐに証文綴りを探して走り回りましたが見つかりませんでした。その出来事はあつという間に人々に伝わりました。

数日後、銀蔵がいつものように貸した金の取り立てにまわると、

「さて、銀蔵さん、私はいくらお借りしましたかな。」

「銀蔵さん、この前お返ししたじゃありませんか。」

「いつもの証文を見せてください。」

などと、人々は言うのでした。あまりにも多くの人にお金を貸していたので、さすがの銀蔵もそれぞれいくらか貸したのか、正確には覚えておりません。それに証文がなければ、借金の証拠がないから取り立てはできません。

「くそつ、カラスめ。」

銀蔵はカラスを憎み、証文綴りを必死になって探すのでした。しかし、どこを探しても証文綴りは見つかりませんでした。カラスのおかげで、銀蔵の厳しい取り立てから逃れられるのですから、借金をした人々は、ほっとしました。

「カラス様々ですな。」

「あのカラス様は神様の使いだ。」

「カラス大権現様。」

と人々は、カラスをたたえ喜びました。

取り立てできなくなり、がっかりしている銀蔵のところには、不思議な手紙が届きました。

〈証文綴りが欲しければ、十五日亥※注2の刻に、金現寺地蔵堂の賽銭箱さいせんに二十両入れ、地蔵堂の鈴を鳴らすことと、書いてあります。

銀蔵は、

「くそつ二十両か、だが、証文綴りが戻ってくれば、また取り立てができる。借金をとぼけたやつら、今に見ている。」

と、金貸しで貯めた二十両を賽銭箱に入れることを決めました。証文綴りが戻らと思った銀蔵は、

「今日は証文はないが、今度証文を持って来るから、その時までに残りの借金をそろえておけ。びた一文まけないからな。」

と、人々にいつも以上に厳しい態度を取るようになりました。慌てたのは金を借りていた人々です。人々は証文綴りが銀蔵に戻らないよう祈るのでした。

銀蔵は手紙の通りに、二十両を賽銭箱に入れ、鈴を鳴らしました。すると、上から紙切れが落ちてきて、その紙切れには「地蔵堂の裏に証文綴りあり」と書いてありました。銀蔵はすぐに地蔵堂の裏に走って行き、証文綴りを探しましたが、それらしきものは見あたりません。

「やられた。」

叫んだ銀蔵は、へたへたと座り込みました。はっと気が付いた銀蔵は一目散いちもくさんに賽銭箱にとびつき、二十両を取り出そうとしましたが、取り出すことはできませんでした。

すぐに銀蔵は寺の住職を起こし、二十両を返せと訴えました。住職が賽銭箱を開けると、銀蔵が入れたと思われる二十両がありました。住職は、厳おごそかに言いました。

「確かに二十両入っています。でも、銀蔵さんが入れたという証拠がないので、返すわけにはいきません。誰か銀蔵さんが入れたのを証言できますか。」

と銀蔵に尋ねました。もちろん、そんなものはいません。住職は、それなら銀蔵に金を渡すわけにはいけません。賽銭として、寺の普請（建築工事）に使わせてもらうと言いました。

「これは確かに俺の金だ。返せ、泥棒坊主。」

と銀蔵が言うのと、

「僧を泥棒呼ばわりし、賽銭を脅し取ろうというのか。この罰あたりめが。」

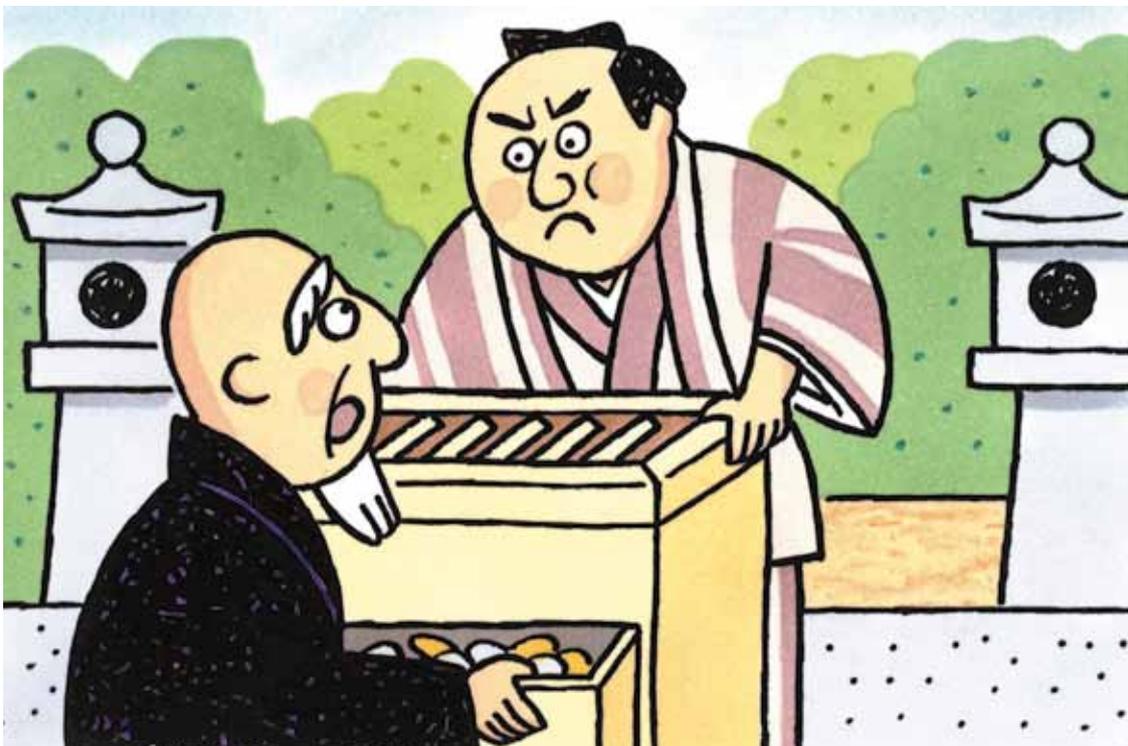
と住職は言い返しました。さすがに銀蔵は何も言えず、がつくりと肩を落とすのでした。このことが噂になると、人々は今度は、

「地蔵様の罰があつたのだ。」

「さすがお地蔵さん、南無地蔵大菩薩。」

と話し始めました。

銀蔵は、金貸しで稼いだ二十両も失い、人に貸す金もなくなりました。威勢のいい銀蔵の声は聞こえなくなり、銀蔵の生活は苦しくなり、とうとう銀蔵



は、食べるものを求めて農民たちの家をまわりはじめました。さすがに人々は哀れに思い、銀蔵に米や野菜を分けてやるようになりました。

しばらくしてからのことです。あれほど銀蔵を恐れ、憎んだ人々でしたが、不思議なことに、証文綴りがないのに、

「このくらいの借金があった。」

「このくらいなら返せる。」

と、銀蔵に借りた金を返す者が現れてきました。銀蔵は、いくら証文綴りを突き付けても借金を払わなかった人々が、一人また一人と借金を返し始めたことを不思議に思いました。銀蔵は、思い切って尋ねました。

「証文もないのに、なぜ借金を払うんだ。」

すると、人々は、

「貧しいが、盗人ぬすっとにはなりたくねえ。」

「お天道様てんとうさまが見てござる。」

と、答えるのです。

銀蔵は、それを聞いてぽかんとしました。銀蔵は腕組みをしたまま考え続けました。

「そうか、お天道様か。」



と膝を打ちました。

その後、銀蔵は、手元に戻った金でほぼそと商いを始め、以前のような金貸しをすることはありませんでしたとさ。

※注1 床几：数人掛けられる程度の横長に作った簡単な腰掛け台。

※注2 亥の刻：午後十時頃。